平成 28 年度厚生労働科学研究費補助金　成育疾患克服等次世代育成基盤研究事業

# 「乳幼児突然死症候群 (SIDS) および乳幼児突発性危急事態 (ALTE) の病態解明等と死亡数減少のための研究」

平成 28 年度 分担研究報告書

分担研究課題：病理解剖が行われた乳幼児突然死症候群の実態調査と登録システム構築に関する研究

研究分担者：柳井広之（岡山大学病院　病理診断科）

研究要旨

日本剖検輯報に登録された剖検例から SIDS をキーワードとして症例を抽出し，剖検情報を調査した．過去 10 年の剖検例のうち，139 例が SIDS と診断されていたが，開頭も行われていた症例は 47%であった．出生当日の死亡や死産症例が 3 例あり，1 歳以上の症例が 13 例あった．これらの症例は SIDS の原則的な年齢からは外れている．また，ファロー四徴や無脾症候群などの基礎疾患を持つ症例もあり，これらは突然死分類の II 群に相当する可能性がある．

以上のことから，病理解剖の結果 SIDS と診断された症例の中には厳密には SIDS の定義に該当しないものが含まれており，今後の研究対象を選択する上で注意を要するものと考えられた．また，病理医が SIDS 症例を経験する機会が少ないために必要な検索が行われていなかったり該当しない症例が SIDS とされていたりすることが考えられ，病理医の間で SIDS の病理解剖に対する啓発活動を有効に行う必要がある．

## A. 研究目的

病理解剖が行われた SIDS 症例の実態を調査し，SIDS の病態解明につながるデータが得られる可能性を検討する．

## B. 研究方法

日本剖検輯報に登録された剖検例から SIDS をキーワードとして症例を抽出し，剖検情報を調査する．

## C. 研究結果

過去 10 年間で 139 例が SIDS と診断されていた．そのうち脳の検索が行われていたのは 47%であった．1 歳以上の症例が 13 例あった．複雑な心奇形等の基礎疾患を持つ症例があった．

## D. 考察

病理解剖で SIDS と診断された症例の中には，検索範囲が不十分であるために診断の手引きの定義に従うと SIDS と診断できない症例が多い．また年齢の原則から外れる症例や突然死分類の II 群に相当すると考えられる症例もあり，病理医の間で手引きにおける SIDS の定義が周知されていないことが考えられた．

## E. 結論

病理解剖で SIDS と診断された症例の全てが SIDS の基準を満たしているわけではなく，研究対象とするには症例の選択が必要である．

## F. 健康危険情報

なし

## G. 研究発表

1. 論文発表

なし

2. 学会発表

なし

## H. 知的財産権の出願・登録状況

１）特許取得　なし

２）実用新案登録　なし

３）その他　なし